

みんなの居場所

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、諺、慣用句等を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和7年11月17日(月)

「熊本県学力調査に向けて」

【雑感】学習には読書が必要

12月の熊本県学力調査に伴い子ども達からは「え〜…」という声が聞かれますが、学力調査の「問題文の長さ」や、「複複」という印象があるかもしれません。でも、毎年高得点を取る子ども達の特徴として「読書量」と「読書の質」が高いといつてかまひりません。本をよく読んでいる子は、問題をしっかりと理解でき、「何を問われているか」を把握した上、問題に答へてくれます。必要な情報を探して出し、それを活用する。そしてそれをアツアツフィニッシュしていくことができるのです。今、文部科学省が子ども達に求めている力はこのような力なのです。

主幹教訓時代、6年生の学級で算数の授業をしていた時のこと。6年生は「1:1 比例と反比例」について学習をしていました。毎日楽しく、厳しい雰囲気の中で学習が進んでおり、解らない所があってもよく質問してくれて、私も自分自身の指導を振り返ることができ、嬉しく感じていた頃です。そんな中、一つの瞬間に気が付きました。「一言で言えば、読書量が足りないこと」に起因する読書不足で、問題の背景や連続性について俯瞰できないということでした。**①**という問題があつて、その小設問が**①②③**と並ぶような場合、**①②③**は関連していることが多いのですが、その関連を見いだせない**と**、問題を解くことができません。このような問題は、まず全文を読むことが大切だと思うのですが、子ども達の問題の背景を表す文を読んだ後、**①**を読んでもすぐに答えを導き始めるようです。そして**②**の問題は、そのつながりを無視して解き始め、当然、誤答になってしまいます。やはり文章を理解する力に問題があるのだと感じています。本は読まなければなりません。長いスパンで学力を定着させていくためには、その基盤が必要で、多くの言葉を知するための読書が、活きて働く知識の基盤となるようです。これからの読書、考えてみたい。

子ども達が生きる未来社会②

子ども達が生きる未来社会は、人生100年時代です。

寿命の長期化によって先進国の2007年生まれの2人に1人が103歳まで生きると「人生100年時代」が到来する、100年間生きることが前提とした人生設計の必要性がある訳です。これまでの人生設計は「20年学び、40年働き、20年休む」という「教育・仕事・老後」の3段階が一般的でした。しかし、100歳まで生きるとが一般化する社会では、年齢による区切りがなくなり、学び直しや転職、長期休暇の取得など人生の選択肢が多様化すると予想されるのです。今は、65歳まで働けばなんとかなるだろうという考え方もあるようですが、そう簡単にはいかないのが、現代社会です。人生設計そのものを根本から考え直す必要があります。

でいい。何をすればいいのか？ そんなにすぐに数十年先の社会を見据えなさいという訳ではないのですから、先ず子ども達がいやならねばならないのは、主体的・協働的な学習です。そして身に付けた知識理解を基にした創造的な学習をすることが望まれます。新しいものを生み出すには、新しいことにチャレンジすることが重要です。そのような姿勢を今のうちから育み、未来に備えたいものです。

シリーズ「自分を語る」#52

玉名町小学校での2年目、こゝで初の4人、195kmナイトハイクでした。この行事の凄いと云は、味わる達成感と充実感、友だちとの繋がりやの強さを感じることや、たのびる点です。玉名町小学校では、ナイトハイクや強歩会では必ず班を編成しましたので、途中で投げ出す子もいませんでした。どの班にも辛そうに歩く子がいました。たのびながら仲間が荷物を持ってくれたり、声を掛け合ったりしなから、全員が目標に向かっただけでチームで協調することができていました。その結果、達成感や充実感、友だちとのつながりを感じることができるといふわけです。この年の子どもの中に、歩くことが苦手な子がいました。彼は参加をためらっていましたが、友達からの誘いによって参加を決めた子です。彼は「ゴールする前の数時間、班のメンバーに腕を抱えられて歩いていました。本人は「途中何度もめよめよと思つた。」と言っています。その後の彼のセリフには笑いました。周りの子は「一緒に歩き通そう。」とか「頑張ろう。」と声を掛けてくれたのをうです。行事が終わって本人に「歩き通せたね。」と声を掛けると、「うーん言ひ返しました。」

「だって、班のメンバーを指さし」これが無理やり引きずった。仕方なく歩いた。みんな大笑いでした。この子の卒業文集には6年生の最高の思い出として「ナイトハイク」のことが書かれていました。その文章の中にこんな一節があります。

「ほくはタイハイクの時、参加しなければよかったと何回も思いました。でも歩き通すことができた。ななかとうつと及んたちがほくを引っ張ったからです。その時ほくは泣いてしまいました。でも、今は感謝しています。たぶんこれからは42・10kmを歩くようにしたいと思います。最初に最後の挑戦から始めよう。」

彼はその後のナイトハイクのサポートには一度も来ませんでした。体重を落とさなければならぬと考えたのでしよう。今では私と同じくらいに身長ですが、体重は私よりも軽くなりました。現在彼らは40才、各10回で活躍中と云わね。

平成9年度末、私は校長室に呼ばれました。年度末と云うのは、学校では次年度の組織などをとるにすぎず大忙しの時期です。何となさ、状況を悟りました。「何をしろと言われるのさうっ…」と不安になりつつ校長室に入りました。

「おかげなやう。」 「・・・」 「先生、来年度の学年の希望がありますか？」 「6年生はいいね。」 「えい」 「できれば5年生まで」 書いています。

組織を考えた末の校長先生の決断ですから、喜んで引き受けました。まあ、何かあるのだと思うてはいましたが、6年生の担任はそれに増して、遣り申斐が感じられるものです（私にとっては）。前年度の先生の良い点を活かしながら、自分の力量を發揮してゆき、ついに気持ちよく引き継ぎました。

平成10年度に担任させて頂いた学級は、学級の中に不登校傾向のお子さんがいました。(今では元気に働いていますので付け加えておきます。)不登校傾向の理由はこうでした。「怠惰」です。申し送りで、怠惰に対する大人の毅然さが足りなかったのではないかと、私個人の感覚として感じました。

(一〇)